

強情を以て今年を終るなり

藤田湘子

初心の頃、まず「俳句は自分のために作る」のだと教わった。そして、定型、季語、切字の三つが揃うことで十全の力を発し、技法として「切字」「省略」「リズム」が大切と。また、多くの俳句入門書には、「対象が見えるように作れ」と、客観写生の必要性も説かれていた。

しかし、俳句歴四十年以上の湘子が、自分の殻を破る為と同じことを考えていたのでは革新がない。一日十句の行を自分に課し、すでに二年目の年の暮。

漢語の「強情」を前面に押し出し、あえて物を出さず、季語「今年」の観念世界を広げ、「終るなり」と切字を利かす。虚子の「去年今年貫く棒のごときもの」と共に、百年後の読者に自分を問うているようでもある。

1984年 (S59.12.21作) 第六句集『去来の花』鑑賞・轍郁摩